
猫の放課後

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫の放課後

【Nコード】

N1175K

【作者名】

源雪風

【あらすじ】

クールな転校生が屋上で出会った変わった少年。猫好きにすすめしたい、ほんわか青春ストーリー。

夏休みが終わり、二学期が始まるころ、俺は転校した。

慣れていることとはいえ、新しい学校で、モノ珍しい転校生として紹介され、たくさんの奴に見世物にされるのは嫌だ。

そのたび、ストレスでつぶれてしまいそうになるが、何食わぬ顔でやり過ごすことにしている。

もし、弱みを見せたら、笑いの種にされるから。

まあ嫌われたって一か月もすれば、また転校することになるから、どうでもいい。

むしろ、嫌われている方が出て行くときに悲しくなくていい。

昼休みになると、クラスのお調子者とその仲間たちが寄ってきて、質問攻めしてきた。

大体「どこから来たの?」とか、「血液型は?」とか、言ってくる。俺はどこから来たんだろう。

転校しすぎて、俺の居場所が分からなくなった。

そう思うと目の前がぼやけてきて、もう全てがどうしてもよくなって、気が付いたら屋上に逃げてきていた。

息苦しさから解放されて、屋上の隅っこに座って深呼吸した。

新鮮な空気が全身にしみるように広がって、ようやく本当に解放された気がした。

そのまま眠ってしまいそうになっていると、もう一人屋上にやってきた。

おっとりした感じの男子だ。

たぶん同じクラス。

「だいじょうぶ?」

ぼやーっとした目で俺を見て言った。

目が合いそうになったので、慌てて俺は目を逸らす。

「何だよ。」

「いきなりみんなをほったらかしてどっか行っちゃって、びっくりしたよ。」

やってきた奴は、話し方もおっとりしていて、全然びっくりした感じが出ていない。

こいつはクラスで浮いているんじゃないだろうか。

変な転校生をわざわざ心配して追いかけてくるなんて、友達を作りたいがための悪あがきにしか思えない。

「すごく顔色悪いよ。」

「うるせえな。ほっといてくれよ。」

「でも君、なんだかとても悲しそうだから……。」

俺が、悲しそう？

たぶん俺が、転校生だからそう見えるんだ。

おせっかいな奴。

でも、本当に転校生だからだろうか。

自分で自分の顔は見えないから、自信がない。

よく知らない奴といきなり話すのは不安だが、こいつは無害そうなので返事をした。

「俺は、悲しそうに見えるか。」

「うーん。なんて言ったらいいんだろう。」

おっとり君は考え込んだ。

ちよつと馬鹿っぽい。

「……きみは、捨て猫みたいな目してる。」

「捨て猫？どうして。」

「寂しそうつていうか、誰かに甘えたいって感じがする。」

今まで色んな奴を見てきたが、いきなり初対面の俺に、心を抉るようなことを言う奴は初めてだ。

俺は怒りを通り越して、おっとり君に興味を持った。

「悲しいとか、寂しいとか、我慢しないで言っただ方がいいよ。」

「我慢なんか、してねえよ。」

「僕には無理しているように見えるよ。」

こいつは、おっとりぼんやりしているように見えるが、実は人の心を見抜く天才なのかもしれない。

こいつには隠しても無駄か。

「俺は、転校ばっかで、疲れた。いくらいい学校でいい友達が出来ても、しばらくしたらすぐ転校だぜ。やってらんねーよ。どうせすぐ別れることになるんだから、友達作ってたって辛いだけだし。」

俺は、おっとり君に背を向けた。

涙が出てきそうだ。

泣いているところを見られたくない。

「そっか……。」

校庭からは元気な声が溢れんばかりに聞こえてくる。

夏の終わりを告げる風が頬を撫でた。

「いきなりだけどさ。どうせ死ぬなら、生きているうちは楽しみたいと思わない？」

「それがどうした。」

泣いているのがばれないように、俺は気を付けて言った。

「学校も、どうせ転校するんだから、いるうちは思いっきり楽しんだ方がいいと思うよ。」

おっとり君は、彼なりの一生懸命な声で言った。

「……そうかもな。」

「それに、人はたくさんのお会いと別れで強くなるんだよ。だから、いっぱい転校したってことは、いっぱい出会って別れたわけだから、最強だよ！賢者だよ！勇者様だよ！うん。きっとそうだよ。」

「俺が……最強？」

俺は久しぶりに声を出して笑った。

「お前正気かよ。」

おっとり君はにこにこしている。

やっぱり変な奴。

「と、いうわけで勇者様。今までの冒険の物語を、庶民の僕に聞かせてください。」

「俺は勇者じゃないけど、話そうじゃないか。俺のしょぼい冒険を。」

俺は今まであった面白いことを思いつく限り話した。

「さすが。たくさんさんの冒険をこなしてきただけあって、楽しい思い出もいっぱいなんだね。」

「その代わり悪い思い出もどっさりだけだな。」

おっとり君は、覚悟を決めたように、キツとなって言った。

「僕も冒険の仲間に加えてほしい！」

俺は柄にもなくじいんとなって、一点の迷いもなく答えた。

「いいよ。」

「やったあ！青春という名の冒険の始まりだ！」

俺たちの冒険の始まりを祝福するかのように、優しくゆったりとしたチャイムの音がした。

放課後。

おっとり君とその友達が、俺の机へやってきた。

おっとり君は、目をきらっきらさせて

「僕の友達にも、さっきのすごい話をしてよ。」とせがんできた。

「帰りながらいいか。」

というわけで、おっとり君たちと話しながら帰った。

たくさんの方に話を聞いてもらえて、うれしかった。

でも、家に近づくにつれて、少しずつ減っていくのが悲しかった。

まあ、明日になればまた会えることだし、いいか。

最後におっとり君と俺だけになった。

「なあ、一つ聞いていいか。」

「なに？」

「どうして俺に、優しくしてくれたんだ。あんなにたくさん友達がいるなら、悲しそうな俺なんか放っておいて、あいつらと話してい

ればいいじゃんか。」

おっとり君は、ちよつとびつくりしてから言った。

「じゃあ君は、捨て猫がいたら素通りする？」

「俺、そんなに捨て猫っぽいかな？」

「ごめんごめん。家で猫を飼ってるから、つい人を猫に例える癖があつて。」

「その癖、社会に出る前に直しといた方がいいな。直さないと上司に向かつて、ドラ猫っぽいですね。とか言つて首になるかもな。」

おっとり君は、ふんわりと笑つた。

「そういえば前ね、先生に向かつて、三毛猫っぽいんですね。つて言つたら大笑いされたことがあつたよ。」

「ふーん。ところで、俺はどんな感じの捨て猫なんだ？黒？白？目の色は？」

「えつとね、黒くて目の黄色い猫。体つきは太りすぎでもなく、やせすぎでもない感じ。」

おっとり君は、言い終わつた後、達成感からか、満足げだ。

「ふうん。じゃあ前はどんな猫？」

「あ・・・！それは考えたことなかったなあ。じゃあ、紳君が考えてよ。」

いきなり俺の名前が出てきてドキツとした。

覚えていてくれたのか。

よし。いい感じの猫にしてあげよう。

でも、いい感じの猫っていうのは人によって違うし、難しいので、ここは思つた通りに言おう。

「毛がもさもさ生えてて、ふんわりした猫で、色はベージュ。動作の一つ一つがゆったりしてて、日向ぼっこが大好きって感じ。」

「それ、僕の飼い猫の特徴にぴったり合うよ。やっぱり飼い主に似るのかなあ。」

「飼い主が猫に似るのかもよ。」

大きな太陽がとろとろ溶けて、空と雲を茜色に染めている。

「あつ！ちようどいた！あれが僕んちの猫。マロンって言うんだ。
おっとり君が指をさした先には、まさにおっとり君らしい猫がゆっ
くりと塀の上を歩いていた。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1175k/>

猫の放課後

2011年1月16日02時24分発行